

女子美制作・研究奨励賞達成・進捗報告書

加古 智子

【略歴】

1983 東京生まれ

2005 女子美術大学芸術学部洋画科卒業

2005 渡独

2014 Akademie der Bildenden Künste München卒業 Markus Oehlenに師事。

現在、ベルリン在住。

【個展】

2018 「Amaru」 Salon No,5/ ベルリン

2019 「New Trip to the wild」 Link/ ベルリン

2020 「Plate!Plate!Plate!」 Chi & Co, ベルリン

2021 「Satoko Kako Ceramics Exhibition」 Atelier Anorm/ 富山

2022 「Satoko Kako Ceramics Exhibition」 City Shop/ 名古屋PARCO/ 名古屋

「Satoko Kako Popup Shop」 cafe&books bibiotheque/ 大阪

2023 「Satoko Kako Ceramics Exhibition」 OOMACHIGALLERY/ 福島

「Berlin, Winter, I thought of Berlin」 岩田商店Gallery/ いなべ市

「Berlin, Winter, I thought of Berlin」 Asita_room/ 大阪

【主なグループ展】

2006 「Local Signals」 Galerie Zero/ ベルリン

2008 「Hirnlego」 Madonnenatelier/ ミュンヘン

2009 「Große Malerei Ausstellung」 Lothringer 12 Städtische Kunsthalle München/ ミュンヘン

2013 「Unorte」 Weltraum/ ミュンヘン

「TUMBLEWEED」 Happy Pieces/ ミュンヘン

2014 「TUMBLEWEED-Sommer Nachttag」 TOKONOMA/カッセル

2015 「Tumbleweed; Tsumuji (Crossroads)」 Gallery 9.5/ 京都

2020 「Hotmess」 Prince Charles/ ベルリン

2021 「Hotmess」 Napoleon Komplex/ ベルリン

「Nacht Pflanzen」 Hilbertraum/ ベルリン

「Les Choses」 Purgal Deliatessen/ ベルリン

2022 「Hotmess」 Kühlhaus/ ベルリン

「Sommerfrüchte」 Kunzt66, ミュンヘン

「Nachtpflanzen 2」 La Datcha, ベルリン

【アーティストレジデンシー】

2007 Villa Waldberta/ ミュンヘン

【受賞・助成】

2023 第23回女子美制作・研究奨励賞 受賞

1. 制作・研究の動機・目的

私は2005年に渡独して以来、ドイツに活動の拠点を持っています。ミュンヘン美術大学を卒業後の2015年1月、京都での「Tumbleweed; Tsumuji (Crossroads)」グループ展を開催した以外では日本での展示経験がありません。私が渡独した当初は、まだSNSが今ほど浸透していなかったもので、ドイツでの活動が日本に住んでいる方々に伝わることはありませんでした。しかし、昨今SNSユーザーの増加に伴い、自分の活動が少しずつ日本の方々にも伝わっているという実感が出てきました。そこで、日本からインターネット上で私の活動を見てくださっている方々に、実際に作品を見せる機会を設けたいと思うようになりました。

また、絵画と陶芸のカテゴライズを超えて、同じテーマで制作し、鑑賞者が、作品をマテリアルで区切ることなく鑑賞できるような展示を達成したいという目的もありました。

2. 制作・研究活動

・2022年12月/制作準備中/ベルリン

今回の助成金を応募する段階で、個展のお誘いを受けていた岩田商店ギャラリーの方と連絡を取り合いながら、実際にいったことのない展示会場の大きさを確認しながら、作品のサイズやテーマを探る。

岩田商店ギャラリーは、松風カンパニーが運営するギャラリーで、愛知県いなべ市に所在する。松風カンパニーは、ギャラリー運営の他に、レストラン・パン屋の経営をしており、それらのお店で使用する食材を自ら管理する畑から調達している。

・2023年1月/制作準備中/ベルリン

岩田商店ギャラリーでの個展を、大阪に巡回することを思いつき、友人のツテを通じて、クリエイティブスタジオ、アシタノシカクが運営するAsita_roomを紹介してもらう。メールを通じて、8月に個展開催の承諾をいただく。こちらの場所も実際にはいったことのない場所なので、担当の方とメールでやりとりしながら、巡回する作品の量などを念頭に入れておく。

・2023年2月～4月/制作期間中/ベルリン

個展へ向けて、陶器の壁掛け作品を3点。1,6mx1,3mの絵画。小さめの絵画作品を4点(30cmx40cm, 40cmx30cm, 40cmx50cm, 20cmx30cm)。大きめの陶芸作品3点(50cmx50cmx60cm, 50cmx60cmx40cm, 35cmx35cmx35cm)。サイズが小さめの陶芸作品を10点ほど制作する。

制作を始めた時、ベルリンは冬真っ只中で、そんな中、未だいったことも、見たことも、聞いたこともない、いなべ市という場所についてたくさん想像をした。ベルリンは10月の末頃には、夏時間が終了し、午後16時頃には外は真っ暗になる。夏の夜が長いので、その反動もあり、冬は皆、無口無表情になる。ベルリンの冬が好きだという人はなかなかいない。冬が深まる中、私は自宅とスタジオ、子供の幼稚園、この3点の往復を黙々と繰り返す日々だった。2月末、ウクライナ侵攻が始まり、ベルリンの街にもたくさんの難民が戦争を逃れ、命からがらベルリンに到着していた。子供の幼稚園でもウクライナへの募金活動が始まったり、ウクライナ難民の子供たちが受け入れられたりして、戦争の気配を日常の中で感じる日々だった。

そんな中、6月のいなべ市での個展は、私にとって希望の象徴のようなものになった。春のいなべ市、春が終わり夏が始まる予感を夢想する毎日で、テーマを「いったことのない町の春を想うこと」にした。

日本を離れて、約18年の間、6月に日本にいたのは一回あったかなかったくらいなので、そもそも自国のことなのに、「日本の春」はもはやフィクションだ。ここでの春は、戦争のニュースが日々流れる中で、希望のようなものにおきかわっていった。

日本で発表する機会が得やすいのは、サイズの小さな作品が多いので、今回の個展では、なかなか展示する機会が得られない、サイズの大きな、立体作品・絵画を発表したかった。

サイズの大きな作品では、自分の表現の幅が広がる感覚があり、自分がものをつくり続けてきた原点に回帰するような気持ちの良さがあった。サイズによって、表現の方法が変化することについて、考えることが多くなった。

・2023年5月/準備期間中/ベルリン

1,6mx1,3mの絵画は、木枠を外し、日本へ運搬することにしたので、ベルリンから日本のウェブサイトから木枠をオーダーしたり、仕上がった作品を念入りにパッキングをして、ベルリンから岩田商店ギャラリーへ発送をした。5月末、日本へ一時帰国。

・2023年6月/準備期間中/いなべ市

6月上旬。いなべ市の個展設営のため、オープニングの数日前にいなべ市入りする。

名古屋駅から、近鉄名古屋線で桑名駅まで行き、そこから三岐線で終点の阿下喜駅まで行く。三岐線は各駅停車で、大きな音をたてて、ゆっくり田園風景を通過する。PASMOは使えなかったのので、切符を購入した。電車はまるで昭和で時間が止まったようで、もちろんクーラーはなく、大きな扇風機が回っていた。三岐線のうるさい各駅停車に揺られて、この田園風景が見られただけでも、この個展を企画した意味を感じられた。名古屋駅から約1時間半ほどかけて、ようやく岩田商店へ辿り着いた。

半年以上前からメールを通じてやりとりをしていた。松風カンパニー代表の松本さんと初めて対面する。設営中は、松風カンパニーの経営するレストランで働く従業員の方々が住むシェアハウスにお世話になることになった。夢想していたいなべ市の6月は、思っていたよりも肌寒く、上着が必要な気候だった。このシェアハウスには、レストランで働く四人の若者たちが住んでいる。設営が終わった後、住んでいる若者が気を使ってご飯に誘ってくれたりして、色々と話をする機会が得られた。都会からこちらへ移住し、働いている方が何人かいて、都会での暮らしよりも、いろいろなものが安価で住みやすい田舎で、自分の目標を達成しようとする若者が増えている理由が、この場所にきて理解できた。ここにくるまで、田舎町ではアートは理解されないし、誰も求めていない。という認識があったが、このような感覚の敏感な若者が、街を離れて田舎町に移住していく流れの中では、文化的な場所の必要性を強く感じた。

代表の松本さんも忙しい中、歓迎の会を開いてくださり、松風カンパニーが、どのようにして始まったのか。など興味深い話が聞けた。岩田商店ギャラリーの特異なところは、このギャラリーが松風カンパニーの経営するレストラン事業に支えられているところだろう。いなべ市は前述したように、田舎町だ。岩田商店ギャラリーのある商店街は今は、ほぼ機能していないのだが、かつてはたくさんのお店が軒を並べ、多くの人が利用していたようだ。時代の流れで、近郊にイオンや大手スーパーが建設され、商店街は消滅した。いなべ市に限ったことではなく、このような事例は日本全国あふれている。松本さんは、岩田商店ギャラリーがこの街の文化を担うことで、商店街を復活させたい。という想いを語ってくれた。このような場所で、アートができることは何か。アーティストが搾取されることはなく、住民の方々と真に交流することは可能なのか。自分の中で、さまざまな思いもしなかった疑問が湧き上がってくる。

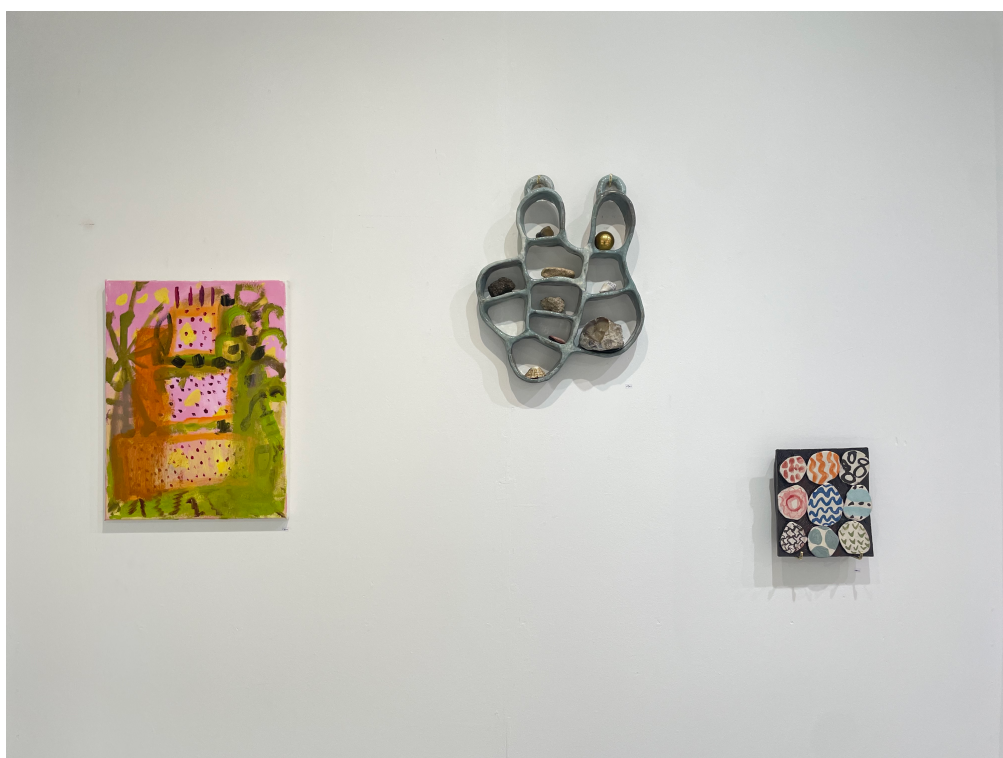
・2023年6月/個展期間中/いなべ市

大きな平面作品と、3点の大型陶芸作品をメインに視点が動くよう、ギャラリーの一番奥の壁に、1,6mx1,3mの絵画を設置し、空間の中央にまとめて、3点の大型陶芸作品を設置した。陶芸作品が後ろに設置する絵画の邪魔をしないように、低めの台を石膏で自作した。3点の作品の大きさが似ているので、この台で高さに差異をつけ、鑑賞者がそれぞれの作品を鑑賞しやすいようにした。

松風カンパニーの皆さん、住民の方々の協力をえて、無事に展覧会を開催することができた。名古屋から1時間半もかかることもあり、当初、誰もみにきてくれないのではないだろうか、危惧していたのだが、予想に反して、SNSを通じて遠方から訪ねてくださる方々がたくさんいて、嬉しい驚きだった。鑑賞者の半分は、松風カンパニー関連、半分は、いなべ市近郊の街から展示を目的に見にきてくれる方々だった。年齢層は20代から30代の女性がメインだった。

松風カンパニーの経営するドイツパンのお店の職人の方が、以前ドイツでパン修行をされていて、二人で、ドイツのこと、日常とアートのこと、いなべ市と岩田商店のこれからについて語らうトークショーを開催した。このトークショーで、特に答えのようなものを探る目的があったわけではないのだが、田舎町でアート関連のイベントを継続するには、やはり市町村の補助金や理解、サポートが得られれば、アーティストが搾取されるままでなく継続しやすいのではないだろうか。ということに、ドイツの手厚い文化への助成を目の当たりにしてきたわたしたちの共通する見解であった。そのような援助が得られない場合は、岩田商店ギャラリーの成り立ちはかなり参考例になるのではないかと感じた。

個展期間中、展示会場の目の前に、新しいコーヒースョップをオープンするにあたり、建物を改装していた。古い民家の壁に、壁画を担当していたアーティストとも交流して、名古屋界隈でのアートシーン、ストリートアートについて話を聞く。彼らの話を聞きながら、私が渡独した直後の空き地だらけのベルリンを思い出した。日本とベルリンでは、文化的土台は違うので比較はできないが、今ベルリンではもう空き地は存在しないし、かつて空き地だった場所には高級マンションが建設され、家賃は毎年値上がり続けている。この18年で、アーティストが集う街から、アーティストが住みずらい街へ様変わりした。もしも、2023年、私が若者であったのなら、おそらくベルリンは選ばず、いなべ市のような田舎町を活動の拠点に選ぶのではないだろうかと思った。



展示風景@岩田商店

・ 展覧会詳細/いなべ市

会期: 2023年6月10日（土）～2023年6月25日（日）

会場: 岩田商店ギャラリー

展示タイトル: 「Berlin, Winter, I thought of spring」



展示風景@岩田商店



展示風景@岩田商店



展示作品@岩田商店



展示コンセプト:

„Berlin, Winter, I thought of spring“

冬のベルリンでは、みんな笑わなくなる。いつも不機嫌なスーパーのおばさんが、さらに不機嫌になる。みんな、笑ったら罰金取られるのか！？というくらい笑わない。ベルリンの冬は長く暗く、鬱鬱としている。今回の個展をするにあたり、岩田商店の松本さんと一年前からInstagram上でやり取りをしてきた。日本ではなかなか発表する機会のない、絵画作品や大きな陶芸作品を岩田商店で見せたいという気持ちがあった。冬、やっと時間に余裕ができたので、作品をつくりはじめた。誰も笑わなくなった、冬のベルリンで、私はいったことのない、いなべの春を想うことにした。みたことのない山、みたことのない春の草花、みたことのない春の小川を想った。一步外に出たら、どんよりとしたグレーの空が街を覆っているのに、スタジオにいる間は、目の前に私の知らないはずの、いなべの春があった。私には、6歳になる息子がいる。息子は毎日飽きもせず、せっせと石と棒を家に持ち帰ってくる。玩具箱がごちゃごちゃになるので、私はこっそりと小石や棒を捨てていた。ある日の午後、ふと息子の拾った小石を一つ一つ眺めていたら、あることに気づいた。息子は、公園にある無数の小石の中から、厳選して、自分が特別だと思うものをきちんと選んで持ち帰っていたのだ。彼にとって、この小石や棒は、大切な宝もので、一つ一つ確実に違うものなのだ。私も、子供の頃は砂場で熱心に石を探す子供だった。私は、いつからか、特別な石を判別する能力を失い。一つ一つ個性のある石達を、「ごみ」としてしかみれない人間になってしまった。その日、私は、毎日石を拾ってくる息子を、石はごみではなかったと思い出した自分を忘れないために、作品に残そうと思った。一つ一つの石には物語があり、その物語は、きっと二、三年したら石を拾ってこなくなる息子への時間を越えた手紙のようになってくれるのではないかと考えた。ドイツで暮らし始めて約20年。今ここにはない、何かに想いを馳せることで、辛く厳しい冬を乗り越えるスキルを、知らない間に身につけていた。そのスキルは、私が特別な人間であるという証ではなく。どんな人も、通り過ぎる日々の中で、石を拾い、春に思いを馳せて、生きているのだ。

"Berlin, Winter, I thought of spring"

In Berlin in the winter, people stop smiling. The always grumpy supermarket lady becomes even grumpier. They are all so unhappy that if they smile, they get fined! I thought of spring. Winter in Berlin is long, dark, and depressing. For this exhibition, I have been communicating with Mr. Matsumoto of Iwata Shoten on Instagram for a year. I wanted to show my paintings and large ceramic works at Iwata Shoten, which I rarely have a chance to show in Japan. In winter, when I finally had some spare time, I began to create my works. In Berlin in winter, when no one smiles anymore, I decided to think about spring in Inabe, a place I had never been. I thought of mountains I had never seen, spring flowers I had never seen, and spring streams I had never seen. When I stepped outside, a gray sky covered the city, but while I was in the studio, the spring of Inabe was right in front of me, a spring I had never seen before. I have a six-year-old son. My son never tires of bringing home rocks and sticks every day. The toy box would become a mess, so I would sneak out and throw away the pebbles and sticks. One afternoon, as I was looking at each pebble my son had picked up, I noticed something. Out of the countless pebbles in the park, my son had carefully selected and neatly picked out the ones he thought were special and brought them home. To him, these pebbles and sticks are precious treasures, and each one is definitely different. I, too, was a child eagerly searching for stones at the park. Somehow lost the ability to identify special stones. I became a person who could only see each unique stone is rubbish. I decided to make a piece of work which can remind me about this son who picks pebbles up everyday and myself who remember those pebbles are not rubbish. Each stone has a story, and I thought that the story would be like a timeless letter to my son, who will probably stop picking up stones in a couple of years. It has been about 20 years since I started living in Germany. Without knowing it, I had developed the skill to get through the hard and harsh winters by thinking about something that is not here and now. That skill is not a sign that I am a special person. Every person lives in the passing days, picking up stones and thinking about spring.

・2023年7月/個展期間中/大阪

岩田商店での個展を終え、Asita_roomでの巡回展開催の準備に入るため、大阪入りをした。大阪で、家族と落ち合い、家族づれでの設営作業が始まった。就学前の子供を抱えての活動はなかなか大変ではあったが、家族の協力を得て、無事オープニングに至った。Asita_roomは、岩田商店とは対照的に、ビジネス街の天満橋に所在している。ビルが立ち並び、たくさんの人が朝から晩まで行き交っている。ここでの観客層も20代から30代の女性がほとんどであった。展示会場が街中にあったこともあり、たくさんの方々が来場してくださった。直接観客の方々とゆっくり談笑する時間もあり、やはりSNS上では体験し得ない、やりとりができた。岩田商店に比べると空間が小さかったため、作品は、テーブルの上に集約させて、壁面作品と分けて鑑賞できるようにした。展示期間は岩田商店の約半分くらいの期間ではあったが、来場者数は岩田商店の3倍くらいあった。Asita_roomは定期的に企画展を開催しているので、アシタノシカクを通しての観客も多く含まれていた。やはりアクセスのしやすさは、展示をする上で集客に大きく影響することを体感。集客は成功を収めたと思うが、テーマがやはりいなべ市に当てたものなので、展示内容が観客にうまく伝わっていたか。という点を考えると、巡回展というのは少し無理があったように感じる。ベルリンから作品を送るので、より多くの人に届けたいという目標は達成できたが、内容として合致しているかという反省点は次回へ生かしたいと思う。冬に想う春。をもっと抽象化する必要があったと感じた。



展示風景@Asita_room

・ 展覧会詳細/大阪

会期: 2023年7月1日（土）～2023年7月9日（日）

会場: asita room

展示タイトル: 「Berlin, Winter, I thought of spring」

SATOKO KAKO
SOLO EXHIBITION
2023

作家在廊
7月1、2、8、9日

**SATOKO
KAKO**

Belin, Winter, I thought of
spring

ギャラリー会場: アシタノシカク ASITA_ROOM

所在地: 大阪府大阪市中央区北浜東1-12 千歳第一ビル2F

期間: 2023年7月1日（土）～9日（日） 平日12時～20時 休日 12時～18時



展示風景@Asita room



展示風景@Asita room

3. 結び

この賞に応募したときは、機能性のある陶芸作品と絵画の両方を見せれる機会がないことにジレンマを抱えていた時期でした。自分の中では、絵画を描くことと、陶芸作品を作るとは深いところで繋がっているのですが、それが公の場で発表した時に、うまく融合して伝わっていないのではないかと、いう気持ちがありました。そんな時、今回の奨励賞をいただき、やっと「同じコンセプトの上で、絵画と陶芸を発表する。」という目標を達成することができました。陶芸には、作品に機能性があると、アート作品として鑑賞されない傾向があります。今回の展示では、どのように表現すれば、絵画と陶芸をカテゴライズせず鑑賞してもらえるのか、という点で試行錯誤しました。私の住むドイツでも、ジャンルに対するカテゴライズが厳しく、陶芸はしばしばアートの枠組みから外されてしまいます。アーティストとして、そのようなカテゴライズから自由であるために、どのように表現し、発表するか、まだまだ道の途中ですが、日本での個展の経験が今度の活動に大きな影響をもたらすことは確実だと思います。

また、陶芸を目的に来客される方と、アートを鑑賞する習慣がある方とで、展示の受け取り方が違うことがわかり、今後の課題として、引き続きどのように、ジャンルの異なるマテリアルを展示するか、考えていきたいと思います。

日本には、アーティストが運営するプロジェクトルームなどがほぼ存在しないので、会場を探すことがなかなか大変でした。ギャラリーに所属していないアーティストは、今後地方に発表の場を設けるのは一つアイデアとしていいのではないかと思います。

今回のいなべ市での経験で多くの学びがあったので、今後は、アーティストレジデンシーなどを積極的に利用して、その場所特有の技術・気候・文化を生かして新しい作品の制作をすることに挑戦したいと思います。私はずっとアートが地元のコミュニティに何が提供できるか。ということばかり考えていたのですが、今回の経験を通して、地元のコミュニティを通して見えてくる社会が、アーティストにどのように影響をするか。という方に視点を変える方が、自然な関わりやアイデアが出やすいのでは無いかと思いました。また、今回巡回展で体験した、都市部との集客数の差についても、次回への課題として、思考し続けたいと思います。